



全本五卷



蘇州府

卷一

蘇州府志
卷一
一、地理
二、沿革
三、風俗
四、物產
五、藝文
六、職官
七、人物
八、雜錄



精工佳紙



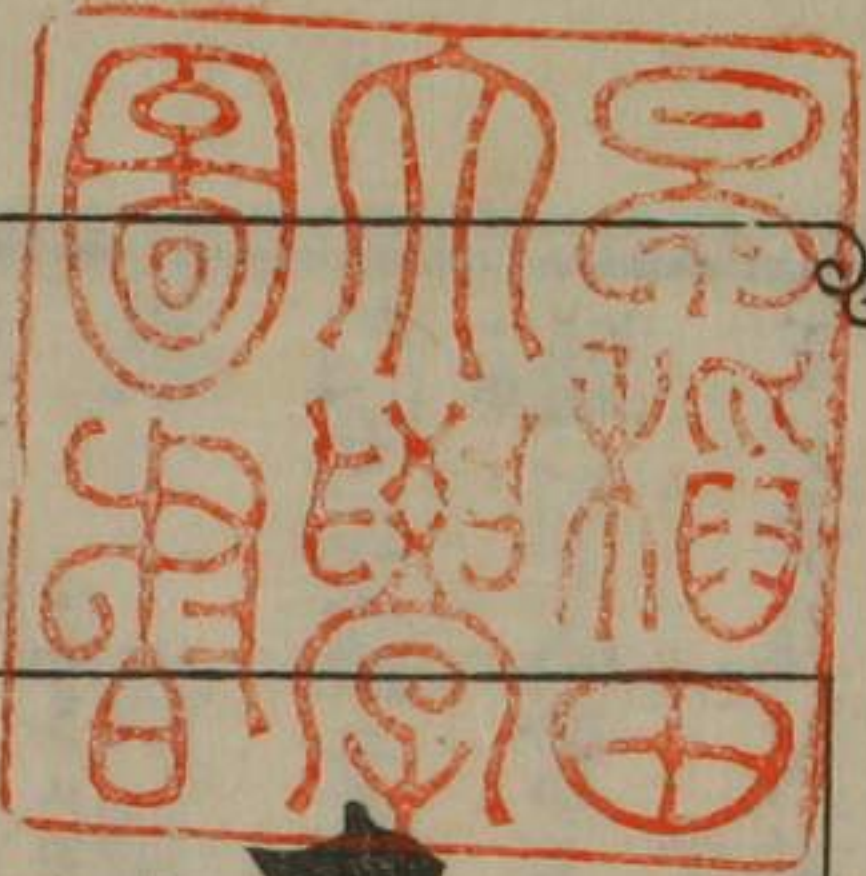
全本五卷

曲亭主人
馬琴編
一勇齋夫
國芳畫

上田

善良狀則扼腕遇奸兇熊則
不平。是匪其性善得天賦。奚
得令然。碗火話說五卷。東都
簞笠翁所作也。其文奇警雄
渾。酷為可見焉。蓋釋史氏之
能紀述人事。雖排入許。子
沈轉倒之態。而於其結。心
乃不過奸兇。懼報殃。善良
應福。以為一大話柄而已。譬

門 遠 13
號 879
卷 1



海月山院 碗之
中
流
亭
十

明治三十二年
三月十日
購

松山卷六十一

猶醫之得證候。而以君臣佐
使。立一藥方也。可見治疾病
與論昏迷。其致乃亦一般矣。
乃以之為序
文化丁卯小春
大阪
馬田昌調撰



碗久ハ伊勢入り家号ハ碗屋字ハ久右門後浪花ニ來テ猫間川
 西林城ノ南門外ニ處其家碗盤等ノ漆器ヲ嚮南ヲ以碗屋ト号ス蓋
 碗久ハ略稱ナリ或ハイフ碗久丁年宛家ニ惑溺シ遂ニ業ヲ廢シ座ヲ
 破リ故御ニ歸テ没ス今猶伊勢ニ碗久が墓アリ亦寄進ノ水盥浪花
 某院ニアリ浪花青樓志ニ云碗久トイフ別人アリ艶曲ノ小歌ニ
 作リ碗久ハ瓢葦カシクヲ附會セリコノ瓢葦カシクハ豪家ノ
 果ニテ散髪法衣偏袒右肩ノ打扮シ杖頭ニ瓢葦ヲ結着
 門々ニ立テ乙食ス人彼が其門ニ立在ヲ見テ通レトイハハ何
 通レトハ君トイヒツ裡ニ入り輕口セリフナドヲイヒテ生活トセシ
 モノナリ又除夜ニ茨屋長左エ門ガ樓上ニテ散豆セシハ玉屋

庄七トイフモノナルヲ彼此撮合シテ碗久が事トセシハ演戲作
 者ノ滑稽ナリ以上按ズルニ愛敬昔男作自笑ニ瓢葦カシク四條河原
 ニテ俗談ヲナスノ圖見エタリカシクハ佛説ニ猖狂輕脱ノ辨ヲマ
 シヘテ人ヲ笑セシモノトオボシ近時東都ノ志道軒似タリ予今
 碗久カシクヲ一人トシ更ニ其名ニ嫁シテ柳巷話説五卷ヲ
 作ル亦是事實ヲ考ルニ足ラズトイハレ専勸善懲惡ノ筆ニ
 操ヲモテ那雜劇ノ脚色ト同カラズ因テ深窓ノ小姐市井ノ
 老婆閱シテ一日ノ戲場ニ換テ可ナリ丁卯夏肆月識ス

江戸 簾笠隱居







見きり久母

吾觀諸法
譬如幻
總是衆緣
所合



好士八太郎

悪漢團平の直六

松山卷

總目録

服部輔次初觀音擧子
 錢懸松團平欺妻賣子
 豊久野悪棍殺其友
 有馬温泉常花締姻縁
 妬婦舊魂温泉憑苑石父子
 野崎浪華津逢古主
 感奇耦碗久惑一弱松山
 長堀橋碗久脱偷難
 貪婪婆殺子比金於土塊
 爲仇所養有無父逢父良家

松山柳巷話説卷之一

東都

曲亭主人

編次

服部捕父觀音祈子と奉く

びろく伊勢國安濃郡掠木の御い安濃の松原を通じて赤宮の順路
 るるくくハ旅客の往還途絶る隙多くて世々より便宜の地なりん
 田舎の似けき商人更なる中服部捕父をいりのありなり原ハ
 當野の御士もく父祖の時まてハ兩刀を帶ふまに家ハ究て貪りりり
 ぼるに捕父ハいさる賤しとく商人の毎日金銭をとり扱ふと羨ミ父
 母をまろりて後ゆく程もく武士を棄て此の田園を治却しこれと奉
 錢干て雜貨店を開設當國の名物伊勢綿の布花井の紙本川崎

此を以て浮く方より心を定めず。人の妻となりて、親の懐子より勝
 るべし。是市平より竹馬の女より小彼亦富の女のわらわが妹
 を娶る。是れ一婚の錢を費し及トと深念し媒も肉らばしく
 直に後合し夫を忘井を妻とする。一りげの浦次が女の違ふ忘井
 いく内を治て薪炊のるに心を用ひし天いよく終ひて是の家
 息長足姫よりを捕りたる。是の隙由く駒の鞭を俟て去る
 早く浦次の年既四十四なるびく目睡ぬ曉る老後のるをどひかた
 何とやら物足らざる心持しつゝ日忘井のるをうごまの男を娶
 こそより五七年を過る。是れ子よりものをこそ推行女の果
 びくも子を産むの縣の是れをまうらうぶくらふ。よりや千くの財室を

藏る。是れ子よりものる。よりせり死て墳墓の土も乾く。小貯録他
 人のゆきありてん。この當國奄藝郡寺家村。今の觀世音の世に
 子安と稱す。靈驗固く掲焉。嘗彼寺の縁起と云く。人皇四十五代
 聖武天皇の御願所は天平勝宝年中に淡海公の建立あり。婦人
 の妊娠を祈り小冥助。又境内に樓あり。年中常懸る花の園と
 して世の人を断接と稱す。平城の御時。天德の樹を禁。葉のこれ
 忽地一夜に枯。是より帝發死。不して舊の寺に遣はる。ゆき
 誓の是れ。指し。さくら花のる人。えや常懸る。らん
 枝葉又繁る。是れ花の咲くと舊の如く。る。めて。死。冥場。る。と
 二百年來の兵乱。疲。堂宇頽破。及。修。覆。進。し。する



果一々兄弟市平と招きよして後のるもどを都合するに市平が常花のや三支にきて乳房がよなるさびのりまうひる。鬼うく入夫せむいこの家と立ぐららん婦の西夫にんあひよろしき筋ゆいねねど縦操と破るても服部の家と相續せむ七夫の對て影護とまへ何まも兄うらねのへといの忘井いひもぬらぬとをばえまののうまといひまから女兒の幼稚て後うそに親族もゆらぬ兄が凍し恃ることをゆきあぶくの兼引こりし市平歡びてのりらその人と索なるゆ近曾菩提所西念寺の寓居服部團平といひののの豊久野守澄七が従事その人とするを尋ねえい相摸の人とく武士の浪人服部何かが一子ありいと

をやくより孤とるによろしく商人の家は其所あゆその十五六年にやびい過世あて親方の刃上零落し妻子眷属を四落八落するぬ團平いづ便るくおむえ遂うらうて伊勢に起き縁由を従事するなるをえ其の澄七は物ごとりの落着をいその後一澄七兼引といひおのの家を養ひて幾許の費あるを厭ひさむぐにひいとく西念寺の食客とるいおまろ今茲廿九歳ゆて忘井は六ツ七ツあつてもとど刃丈も高かりやく面黒く頬髪ゆるゆる生たまはその容年齢より髪より推きより高賣のるに熟くもの書美勤のるは伶俐し其に服部氏るまが浦々を同姓る是といひ彼といひいの人あつるべとく彼澄七が媒妁するにさる縁うにや遂に誓

縁そのひく件の園平浦父が後家に入夫つ家業舊因之相續す
 忘井いそのともゆより前の夫が子安の觀世音に祈りて女子を奉け
 たるも又彼本堂を修覆りてとんと誓言をたら剛原もせぐりまうり
 たるのを園平に物ごとり内なる人こつりて寄進をせしが彼堂
 宇を造りてそとくべとりの園平造りてけり捨てたてぬあまひ
 ころが新入夫とて立地そのを起せん活業を営園するに似
 たり。今二三年まらぬその回へ金もとの墮よそのへと回答す
 忘井も強ての勸ぐてそまのそまをくくく抑此園平の澄七が從
 弟つものめらふ鎌倉のあつた親方の金夥用費しこれ彼地を
 追放さす彼此を徘徊して遂は伊勢に漂泊し豊久の澄七と假初

に父つものるがその公とぬとそとくらね世長なるものる西念寺
 てむくする男のむとゆりつたと彼寺に遣一亦浦父が後家入
 夫すを造りてそが媒妁せし過分の辛苦銭をゆるのそまら久後
 ころがぬゆゆくらとて思ひて誠をうゆひとてら忘井と婚姻さ
 たるあるんさるふよろく園平いぬもぬらさる浦父が名績を相續して
 半年のまりの老實な奉止なるがその年の終りに至りて忘井が兄市
 平岡のところをくらとて臥し病にうらんと僅七日をうりた
 ちて終ぬ男まうりつが園平今人憐るものる是より活業を懈す
 豊久の澄七に測の苔六るどりのものと他まらく交参つ酒を
 賭遊びし程の二三年の回より上を篩果して小厮ぶるひる月の

べたのめらねばいづるまのころにまうして家をも入る愛はなき
 掠本とまきまのて劍尾との隣御のさくやある草屋を求め門辺を
 後簀に圍繞らしめて憩所をなす。燈籠を柱に懸旅客の前後を
 在聲南で親子三人ややくその日を送るに女兒常花は今八才
 ろりて顔色の整好あるのころにさかひなきか憐れむまじき茶の給
 まするをゆいおきしきく世の人口順の頭の茶屋と綽号せり。く
 て園平の茶店を志井のまにちまうして家も居らさく例の悪友
 澄七若六とあきの梅由日を費し彼未の銭二三貫を借るの信を
 のてまざるまらねば祝いなも似げとまを債つてまがも俟ず園
 平八登といひ翌去と延し。ゆまのりりて債らまでゆ日澄七若

六のいふやうにまよふた活物ゆりて輻く十両のまりの分は獲べんまど
 じが物ながら明白の活らまらず汝達とまを助けて如此くく獲らば
 立地の三貫の銭を返すのまらさくその金を配分して三ツツツハ二
 人が辛苦持よとらさぐ。その故の箇様々その謀の如此くまらま
 額とゆい耳とゆいりて密語ハ二人の悪根大に歡ひさしらばある
 せんま既その諳号を定めまらさく外画へぬとの日志井ハ
 朝まに死より常花を喰ひ起して床几を動かさく。茶釜を沸し
 体ら客とまら負よまのよりゆらる夫のう人を思ひありて親子
 うち相語の回日まゆり。斜にまをく未下刻まらん氏士ゆも
 ゆが商人まゆらる旅客まらる轎を動かさく。志井が茶

店の床几は見を無二三碗の茶を喫つて常花とぞんろつて後の
 驛家とてとふ了頭の茶屋とて名する女の童ゆりをばしうか
 うららか想んとおひて茶りしあげもてて花香とくうら
 弟の津國有馬とて藤松何か湯折駭ゆりて湯治する旅客
 の宿するが活業するが湯女も幾人あり又女の童も五七人の
 の女兒の玉糸の御いさら之廣き浪連ゆもゆるさうる田舎
 ひくもを汲せし惜きとより足の子を稱美らそとく懐らぬが
 るて世の中の程ゆるるる忘井もよるる回答て常花今うッ茶を進ら
 せよとゆわくも人駭散動て東の街へ走りゆくもて衆皆と何ぞ
 ぞきく端近うゆりゆくも忘井後まてるをなまめと何のこものめ

して忙しげく走りのもぞと問ハ其入答そ世の膽の太き奴もわ
 めのつゝこのごろ夜もく銭松の銭を盗むるものありとて
 守が捕へり玉馬るふよとく実言る虚言うらんぞと行り
 も果は喘く走去けり藤松とてとて忘井に對ひこの銭松と
 りのりゆるる松とていつと忘井微笑してしる縁起とありあり
 ずやらの劔尾の東なる曠原にありける一株の松ありこの所は往古
 大神宮の行宮の蹟るまむその古迹とていふはよく標の松と
 裁て木の下に祠を建しと見え今ハその祠にうせ松のそおりて
 八人ともこのふ来りて大神宮を遥拜し松の枝に初穂の銭を拭て
 ゆるるとして沙松と稱ゆりさうらふ掛くる沙の敷もろとま

して技もつたるものに入らざりて盗ひまきりてのふ良の
 念發つて彼沙を盗まんとするものもまづ穢い立地に蛇と變
 ぢてその人を逐はるるぞ又彼沙を守るものありて錢と月毎
 本宮へ進らするの昔よりまづとあるをりつる悪入り罰も宗も
 省ずする徳惹さるゝつたんゆゑも憎むれば白後つてその
 に旅客主從舌を卷て神威の灼然をうゝとぬ浩野に豊之野の座
 守澄十七のてて固平を縛めつら素のそとととと茶店の門
 辺引来るを御の老弱先は立後又従ひのとうがま志う罵つら
 その時澄七忘井に對ひこのぞろ錢掛松は舞つる沙の夜ま
 うするものなりと不審とひつる固平が正なるをうゝ人楚と

濡ちしむばうく縛て縁由を責問は盗まける錢ハ都々十五貫
 わまらるるもの入りてつら夫夫婦に由縁あるものなれば他の
 莫のやうにハさしづかむ彼野をちるがうが職後るるに私に
 免がて若立地の液と返されれば生瘡にせらるるんが痛さ
 門もむもさくおとせり阿嫂今の身にして十五貫の液のゆ
 る十平がもめらむとむとむとむとむとむとむとむとむとむとむと
 かりぬびよとて詮合へさうくもさく救ひる人よ金とそ入の依り
 おひひをり又舊の沙引くせれば衆人いるからん果んを後方に
 跟くぞよめたゆとむとむとむとむとむとむとむとむとむとむと
 ころが家の聲言さるるつら裡つら入ら引まゆく屠所のあゆもの



ひつ下田の穂が系隠まにんえおる夫の影と目送るそ一声高く
 泣沈む常花の推ごころにも物の善悪をいれまへん何とせん
 母はるう多る救ごころもいとまをいれまへん親子不覚の泪
 るりおつもゆき武具の葛直にたりのまづ縁由の只今阿婆泣
 て居るごころにゆきを返する遠くへの園平の生るがら落の
 底へ沈ぞうごころの一人るまに世といふらば田園と活却てま
 救ひぬきせんが友ごころの信るまにどきどき貯録もま一常言に
 時の用ゑの鼻も刺さるるあり所詮常花の真愛をむせむの金の
 そのふよふもゆきをいれまへん女思を賣んごころをいれまへん
 媒すべごころ回答もいれまへん志井のいれまへん落る涙をいれまへん

押拭ひ悪入るごころ夫より十五貫の沙由多うごころ殺すと殺ごころ
 さらさらのゆきを子と賣ての過去ゆき浦女ごころ位牌に顔を
 向ぐごころ十年ごころとせむごころ柳巷の男を賣て夫の
 先途を救んごころゆき浦清が箱ごころあうひるたけいおる
 飯らぬ年浪ごころやせまごころやせまごころ思ひごころ一入る氣ごころ
 常花の大人ごころ傾城ごころ遊女ごころをいれまへん常と多る
 を救ごころごころゆきをいれまへんゆきをいれまへんゆきをいれまへん
 他一阿婆ごころ阿爺ごころ母のゆきをいれまへん衣を被てゆき
 らどごころゆきをいれまへん結びゆきをいれまへん帯のゆきをいれまへん自由ごころゆき
 めい何ごころゆきをいれまへんゆきをいれまへんゆきをいれまへんゆきをいれまへん

の死口説ハ忘井膝引りて怜悧々まばこそ年々もまば二十
 足らぬ推見ガ三の年より養ひの憂とあつて痛まや浮世の美
 理にうらまさま下。その養父の縛をどうんよとがに男と愛ハ世
 稀あるべき孝行あり。程とる子とあるも過世の因果をばうら
 悪ううらの子の道と目來教ハ教ても母の却りひぐひるく断と
 うこ死悪世の伴ハ狂ふ意駒もり子ざらハ散とど果しる死
 まむにその私すと昔六とさるぐ練とくらく遂に常花がまをりて
 走り去らんとあつてりるり旅客藤松ハこの口舌に立うねとつとど
 破居つた目今昔六が推見とねとくゆくとするよりをく女をら床
 ルとえままつと昔六とねとめあつたは捨別有馬の湯本めて後妻

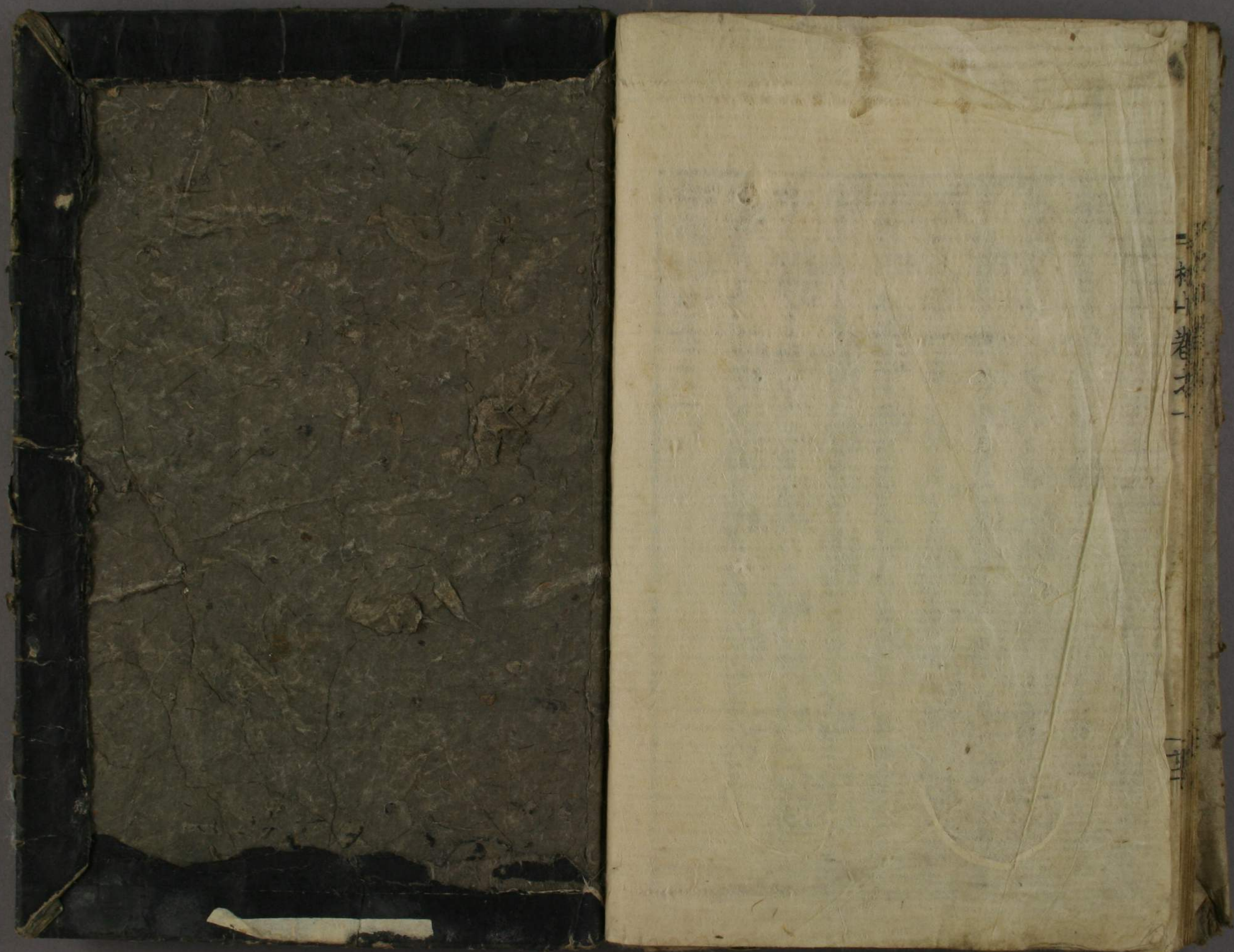
湯の藤松とねとものより傷より縁故と使ハ理するハ母世の愁傷
 健氣あるハ女の童の孝ゆり。そも愛するものさるぐこれの
 常花とやらんを置て故御へおとく飯りるん浮舟の宿のゆづるあ
 ほど懇に此世と離るる世とつととさるのハ大いある親の耻
 るり既ハその孝ゆとあつるまばつと又父母にありりりてとる
 勅り養育べとるてりるるハ十五貫とやらん。こまに五貫と
 ちく年季十八箇年に定め身價二十貫と通子すとつとるハ決
 りたゆと世のるるにハ通つりゆと合せんをらばとく契書と
 字とる形と打りつと昔六と大い教びつとた人の慰ひゆひて
 ちくらるる傍侍より推きもの身價とまばとるゆりハ慈のうへの

悠るり世貫とのいらば夏房まねと信づらしてそこのまは無筆る
まはとらりなく勸め志井に書しとまを板松がわりのにむけバ
板松續くごちて肚巻の賤布より金十五兩のまより出りて志
井に手へる形と懐く扱つゝいさう寔た流しと一河の汲ひもその交
深く雨と一樹小庭も思ひ珠の親しき母のくさる思ひく
のるるとまも又人の子あり今よりいさう艶妖の生育一年まを信の
勢よりいさうが女見や七富家に遺嫁し二親と迎はりて老来の
養ふとよりまて泣て物と思ひの涙とをこめて眼とをまのせま
もまのを懐き忘井はややく頭と擡不意家觀そ物の用はまご
まの推さるものと進しするまは只家への慈を願ふものまをそ疱瘡

麻疹もろろやわしと信ま健にのえまから持病に蛇の信が朝熊の
万金丹のいひま津國の赴ていそまも又便まらら近曾人の言
傳りて買しそ彼まのまのそ針指の隅の撈りてまの女見
が腰の着さそ護るまのそ入まを常花の裡へ觀世音の
影のり裏の裂は母がまのそら身が三毛の髪置に縫て被せり
丹山油のゆめらるは鶴と龜の摺指に命長くれと祝し親の像見
るまは失ひのまのまのそ胸のまのそ口ハまがまのま
高死十八年有馬の松の千年経つとまよりまのまのまのま
繞るまの帯締まのそ七のゆめまを洗濯衣被更さし後じりて拵つる
涙も濡らる水櫛のまのそに引る後髪も乱まの物をまの顔に常花の

久し母の病もよりの思ひて病づらひのすも。ひづる病のよ
 者病の思ひて思ひいひて悲しくなり。よる病をいひ暮るる
 るおもひのいそとひひりけし目と押拭へば志井の毎にその怜れ
 るるに猶も一標致が仇となりて身と棄りて養父を救ふ孝行の
 誉にやる母の因果なるに。いひて傳振実相山の四鳥の別
 外に、雨の驟雨に翅をまきまきなり。花松の形容をて外
 面はまきまき。轎夫を招き入るるに答へるるをいひて常花
 ちりて柱栗する轎の戸に。いひて母とて退く。磯とていひて擡出す轎
 以後。下とて花松の草鞋と穿るる。いひて忙しげに走るる。

柳巷説話卷之一了



二村一巻之一

一

